山鳥毛

日本刀の聖地・長船

備前刀の最高峰、国宝「太刀無銘一文字（山鳥毛）」に迫る

備前刀について

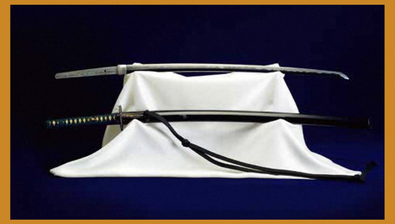
平安時代末期から、現在の長船地区を中心に、日本刀の生産が盛んに行われてきました。この頃から江戸時代初めにかけて、日本全体の約4分の1の刀工を輩出し、その生産量は日本一でした。現在、国宝や重要文化財に指定されている刀剣の約4割を備前刀が占めています。

備前刀の特徴の一つとして、「華やかな刀文」が挙げられます。例えば、備前刀の中には、「匂出来」と呼ばれるように、鉄なのにやわらかくふっくらした印象を受けるものがあります。福岡一文字派の最高傑作との呼び声が高い山鳥毛は、この代表的な日本刀だと言えます。

備前刀の主な流派には、平安時代の古備前派、鎌倉時代初期から南北朝時代初期までの福岡一文字派と鎌倉時代中期から江戸時代末期までの長船派があります。

備前刀は、時の権力者や歴史を動かした人物に愛されてきました。有名な人物としては、まず、源頼朝が挙げられます。屋島の戦いで、扇の的を矢で射抜いた那須与一に頼朝が与えた褒美の刀剣は、古備前派の成高の刀でした。次に、鎌倉時代に承久の乱を起こした後鳥羽上皇です。上皇は、全国から名工を集めて、刀剣を作らせていました。その半数以上が、福岡一文字派の刀工でした。また、足利尊氏は、新田義貞らに敗れて九州に敗走する途中で備前福岡に立ち寄りました。その際、長船派の兼光に命じて、今の彌負神社で刀を打たせました。さらには、織田信長です。信長は、長船派の光忠を好み、二十五口も所有していたと言われています。本能寺の変で自刃した時も、そばに置いていたのは実休光忠だとも言われています。最後に、坂本龍馬です。龍馬が常に大切にしていた脇差は、長船派の勝光・宗光兄弟の合作でした。

このようにして、備前刀は、千年もの間、質・量ともに代表的な日本刀として、多くの愛刀家に大切にされてきたのです。



「日本刀の聖地・長船」を巡ろう

① 造剣之古跡碑

長船の刀工・横山元之進祐定は、祖先の偉業を顕彰するため、大正14(1925)年、自宅の敷地内に刀身をかたどった石碑を建立しました。題字の「造剣之古跡」は犬養毅(木堂)によるものです。

② 慈眼院

古くから長船鍛冶の菩提寺であったといわれています。本尊は阿弥陀如来。天平勝宝年間(749−756)の建設と伝えられる古刊。長船派の刀工・横山元之進祐定が寄進した梵鐘が残っています。

③ 天王社刀剣の森・彌負神社

目を患った足利尊氏が、快癒を祈願して平癒したという神社。長船の刀工達も炎の色を見たり、微密な研ぎ、細工などに欠かせない目を守ったりするために信仰していました。

④ 城ノ内・伝兼光屋敷跡

名工・長船兼光が刀を鍛えた褒美として足利尊氏から賜ったとされる屋敷跡。戦国時代には刀工で武将でもあった勝光らの居城であったと歴史書に記されています。

⑤ 福岡の町並み

福岡はかつて中国地方随一を誇った大商業都市でした。その繁盛ぶりは、関ヶ原で戦功のあった黒田長政が筑前52万石の大名として築城の際、先祖が暮らした備前福岡にちなみ福岡城と名付けたことにも現れています。

⑥ 福岡一文字造剣之地碑

福岡一文字派はここを拠点に活躍しました。山鳥毛はこの辺りで作刀されたのかもしれません。

【お問い合わせ先】

瀬戸内市文化観光部文化観光課

〒701-4292 岡山県瀬戸内市邑久町尾張 300-1

TEL 0869-22-3953

長船周辺で日本刀作りが栄えたわけ

瀬戸内市長船地区には、福岡一文字派が拠点としていた福岡、長船派が拠点としていた長船があり、福岡と長船周辺で、日本刀が盛んに生産された理由としては、

- 古くから製鉄技術を持っていたため、技術者がいたこと
- 中国山地で採れる良質な砂鉄や、熱源及び鍛刀に必要な炭を吉井川によって容易に運べたこと
- 福岡が、中世備前最大級の商都であったこと
- すぐ近くを、多くの人が行き交う山陽道が通っていたこと

などが挙げられます。

長船周辺地図